

1945年の創世記

——ウィリアム・L・ローレンスの広島・長崎関連記事にみる「宣教」としての原爆報道——

永川とも子

1 はじめに

1945年8月7日付のニューヨーク・タイムズ紙(以下、NYTと略記)の紙面は、広島原爆投下という人類を揺るがす歴史的一大事件の報道で埋め尽くされた。一面は “First Atomic Bomb Dropped On Japan; Missile Is Equaled To 20,000 Tons Of TNT; Truman Warns Foe Of ‘Rain of Ruin.’” という見出しが大きく掲載され、続く二面からも原爆製造に関与した科学者達の紹介や被爆後の広島市の航空写真など、センセーショナルな報道に満ち溢れている。中でも、最も人々の注目を集めたのは、時の大統領であったハリー・トルーマンの声明文であろう。本声明文では、原子力は世界を司る全能の力として賞賛され、ドイツに先行してこの力をアメリカが手に入れたことは神の摂理であることが明示され、神なる力、原子力によって新たな時代が到来するであろうことが宣言されている⁽¹⁾。原子力が人知を超えた神がかり的な力

として提示されたこのテキストでは、原子爆弾投下の第一報を人々に知らせるに十分な衝撃性が巧妙に生み出されていると言える。

本声明文は、実は記事冒頭部で紹介されているようにトルーマン自身が執筆したのではなく、影の執筆者が存在することが現在では明らかになっている⁽²⁾。その人物とは、「原爆ビル」なる異名を持つ、ウィリアム・レオナルド・ローレンス (William L. Laurence) である。

ローレンスは、米国政府の最高機密であった原爆製造計画への関与を許可された、唯一のジャーナリストである。1945年7月に行われた人類史上発の核実験、トリニティ・テストや、長崎市への原爆投下に関するルポルタージュを執筆し、これら一連の原爆関連記事によって、ピューリッツァー賞を受賞していることから分かるように、名実ともに彼は第二次世界大戦期の原爆関連報道における米国政府公認のスポークスマンであった⁽³⁾。しかしこうした「名誉」とは対を為すかのように、彼自身の前半生は歴

史に翻弄された暗い翳りを帯びている。

ウィリアム・レオナルド・ローレンス（リトアニア名、Lieb Wolf Siew）は、旧ソビエト連邦領リトアニアの小さな村、サランタイから二十世紀初頭に米国へ亡命したユダヤ系移民である。サランタイは何世紀にも渡り伝統的ユダヤ教を継承してきた村であり、ローレンス自身、正統派ユダヤ教の家系であった。宗教的に恵まれた環境により、彼は幼い頃からユダヤ教の教理を徹底的に教育され、ユダヤ教のラビとなるはずであった。しかしこうした教育にも関わらず、彼は何世紀にも渡って一族に受け継がれてきた宗教と帰属の土地リトアニアを捨てる選択をすることになる。革命に参加後、ドイツ経由でアメリカに密航したのは、1905年のことであったとされる⁽⁴⁾。

ローレンスに限らず、被爆後の広島・長崎に入り現地ルポルタージュを書いたアメリカ人記者は多く、その数は十数人に及ぶが⁽⁵⁾、ローレンスと原子力との関係は、その他多くの報道関係者とは一線を画している。それは以下の様な点においてである。

まず、1940年代初期から蓄積してきた豊富な原子力に関する知識を買われ、米政府から特権的な待遇を与えられていたという点だ。原爆関連の記事を独占して報道することができたのも、またトリニティ・テストという歴史的瞬間を取材することができたのも、この特権的立場によるものであった。ローレンスを公式のスポークスマンとして抜擢したレスリー・グロブスは、ドイツ降伏の直前から *NYT* に近づき、ローレンスの「引き抜き」を打診していたという⁽⁶⁾。第二点目に、広島・長崎を取材した多くの報道関係者とは異なり、一貫して原爆投下への肯定的態度、放射

線病の否定の姿勢を貫いたという点である。こうした姿勢は、近年の研究によって糾弾され、一連の原爆報道に対して与えられたピューリッツァー賞の取消を求める声が挙がっているが⁽⁸⁾、ローレンスが取材した原爆関連記事は全米の新聞に転用されたという点や、広島市への原爆投下の際に発表されたトルーマン声明を影で執筆したという事実、また第二次大戦後も原子力や核兵器に関する著作を発表し続けたという点において、アメリカ人の原爆観形成に関与した最も重要な人物の一人であることは間違いない⁽⁹⁾。

ローレンスの記事の一つの顕著な特徴としては、放射線病の存在の否定に見られるように、広島・長崎の被爆者の立場を顧みない主張を挙げることができよう。すなわち彼の記事には、『ヒロシマ』を著したジョン・ハーシーや一部のGHQ認可記者達が拾い上げた、血の通った人間としての被爆者の「声」は存在しない。いわば被爆者不在のナラティブであり、ローレンスの記事によって作り出された「ヒロシマ・ナガサキ」は、被爆者達が考える「ヒロシマ・ナガサキ」とは、根本的に性質を異にすると行って良い。また、トリニティ核実験の様子が旧約聖書の「創世記」として生命誕生のモチーフと結び付けられていることから分かるように、ローレンスにとつて「原爆」は神の力と同一である。『カウントダウン・ヒロシマ』の著者、ステイブン・ウォーカーの言葉を借りるならば、正に「原子力へ信仰を捧げた」人物であったと言える⁽¹⁰⁾。

ローレンスの原爆ナラティブはこうした「被爆者不在」という要素によって特徴付けられるが、そもそも何故、このようなナラティブが第二次大戦直後く冷戦の萌芽という米国社会の枠組みにおいて出現し、国民レベルで伝播していったのだろうか。この点

を検証するためには、これら原爆ナラティブを歴史的文脈のみでなく、ナチスという暴力的権力の台頭を極度に恐れた亡命ユダヤ人、“Lieb Wolf Siew”の個人史との関連の内にも捉えていく必要があると考える。

以上を踏まえ本論では、ローレンスによる原爆関連テクストを1940年代初頭〜中盤の米国社会を取り巻いていたコンテクストの内に置き、原子力エネルギーを「神の力」「生命を生み出す力」として描写する語りに内包された意味の可能性を探る。さらに、原子力の仕組みをジャーナリズムを通して伝えることを、原子力という神の物語を「宣教する」行為として位置づけ、これが広島・長崎以後の米国社会で如何なる意味を持つものであったのかという点を追求することが、本論の最終的な目的である。

2 「ユダヤ人」の傷

1956年にLouis M. Starrによって行われたインタビューの中で、ローレンスは科学とは宗教であり、ジャーナリストとは科学という神の啓示を伝道する宣教師と同義であるという見解を示しているが⁽¹⁾、この言葉通り、ローレンスの原爆ナラティブの中心においては、原子爆弾の破壊の側面に「新世界の誕生」や「調和」「創世」といった意味付けが頻繁に行われていることに加え、全てを司る神のイメージが投影されていることが確認される。ローレンスは原爆を語る際に、何故こうした言語を多用する必要があるのだらうか。また、これらのメタファーや意味付けは、何を示唆するものであったのだらうか。

ローレンスの前半生の中で、1888年の出生から1905年に合衆国へ単独で亡命するまでを過ごしたサランタイという共同体の存在は、彼の原爆テクストとの関連性をみる上でとりわけ注目に値するように思われる。リトアニア時代の足跡が如何なるものであったのかを知る手掛かりは、先述したLouis M. Starrによる1956年のインタビューに見出すことができる。その中でローレンスは故郷サランタイについて、「中世から時が止まったような共同体」であり、「毎日が同じことの繰り返しで、あらゆるものが変化していくことが許されない、閉鎖的 성격が濃厚な空間である」と述べている⁽²⁾。さらに、こうした閉塞性はユダヤ教の深い信仰と共鳴していることが示唆されているが、興味深いことに、ローレンスはこの共同体の中で、ドストエフスキーやゲーテ、マルクス等のユダヤ教関連以外の書籍や思想に触れることを禁止されていたという⁽³⁾。故郷の共同体の中では、神への従属のみが義務付けられており、世の中の仕組みを理解することが抑圧されていたのである。村落共同体内におけるこの抑圧という経験は、世界の全てを司る原子力という「神」の正体を追求するという行為が後にテクストの中で為されていることを考慮するならば、とりわけ注目に値する事柄であるように思われる。神の正体を知ることは、故郷の共同体では抑圧されていた世界の原理を理解することを意味しているためである。

故郷の村に中世から連綿と伝統的ユダヤ教が受け継がれてきたことの背景には、こうした保守的な土壌が関係していることが窺えるが、一方でローレンスが“Lieb Wolf Siew”として生きていた時代において、この共同体には後の暗澹たる運命を予兆するかの

ような暗い影が既に存在していた。全世界のユダヤ人の系譜を調査している組織 JewishGen は、十九世紀末〜第二次大戦期におけるサラントイの詳細な記録を保存している⁽¹⁴⁾。この記録によると、サラントイはローレンスが幼年・青年期を過ごした十九世紀末より、ユダヤ系住民に対する迫害が盛んとなり、その結果、シオニズムが非常に浸透する結果をもたらした。当時の移民名簿は、サラントイにおけるユダヤ系住民への迫害とシオニズム運動の影響を如実に反映している⁽¹⁵⁾。これによると、世紀転換期の1880年代後半から1920年代初頭までの間、米国、イスラエル、南アフリカのいずれかの国に移住した住民の数はおよそ300名にのぼる。1880年時点でのサラントイにおけるユダヤ系の「世帯数」が300であったことを考慮すると、かなり高い割合で住民達は他国へ移住していたと言えるだろう。ローレンスが1905年に合衆国へ単独で亡命した後、サラントイは歴史の波に翻弄されてきたが、この村に致命的な傷をもたらしたのが、第二次大戦とドイツ軍によるリトアニアへの侵攻である。ナチス・ドイツが1941年6月にサラントイへ侵攻してから同年9月にかけて行われた大虐殺によって殺害されたユダヤ系住民の数は、440名にのぼる。これは当時村に居住していたユダヤ系住民の90パーセント以上に相当する数であり、このホロコーストによりローレンスは母を初めとする家族を失っている⁽¹⁶⁾。故郷サラントイの人々が直面したこの悲劇的運命を、ローレンスは後に知るこゝとなるのだが、この出来事は自らにも起こり得た運命とも言えるべきものであった。

さらに留意すべきは、ローレンスが原爆について書いた数々の

テクスト内でナチスへの懸念を度々表明しているという点である。 「ナチスという脅威への対抗軸としての原爆」という言説を大衆レベルで広めていったのは、実はローレンス自身であったのである。この言説流布の契機となったのが、1940年5月5日NYTに掲載された核分裂に関する記事である⁽¹⁷⁾。ナチス・ドイツが原子爆弾を製造しているかもしれないという懸念は1940年の段階で既に、ヨーロッパからの亡命科学者達の間で広がっていたが、ローレンスによるこの記事は、米国の原爆製造に「ナチス・ドイツという悪の蔓延を阻止するため」という意味付けを与え、「米国による原爆の製造はファシズムへの強力な対抗軸である」という言説を流布させる足掛かりとなった。ローレンスがナチス・ドイツを如何に脅威とみなしていたかは、他の亡命ヨーロッパ人達の間で極秘事項だったドイツの原爆製造の可能性を、率先して記事にしてみましたことを見出すことができる。ナチスの脅威が大戦の長期化と共に拡大していくにつれ、ローレンスの原爆の語りにおいても、ファシズムという暴力的権力への懸念が並列される形で描かれていくこととなる。

このように、ナチス・ファシズムへの懸念が表出された記述と、原子力＝神の力というメタファーとを合わせて考えた時、ローレンスの一連の原爆記事はある物語性を帯びてくる。この「物語」の中では、原子爆弾によって生み出された力には何者も、どのような力も打ち勝つことができないという原子力の全能性が繰り返し強調されるが、ローレンスがこのように表現する際、原子力はファシズムに対する強力な対抗軸としての意味を付与されている。つまりローレンスの原爆ナラティブの中で多用される「新世界」「創世」「神の

全能性」というメタファーは、全てを破壊しうるファシズムという暴力的権力に対抗するべく、全てを司り、万物を生み出す力を持つ神のイメージと共に使用されているのだ。

米国にとつての第二次世界大戦は、ファシズムという巨大な暴力的権力との戦いでもあった。「原子爆弾」という概念に全能の力を持つた神のイメージを投射することで、暴力的権力への強力な対抗軸としての意味付けを行なったローレンスの語りは、正に大戦中における米国が欲望した物語であったと言えるだろう。原子力という新たな宇宙の力に神を見出した一人の亡命ユダヤ人と、第二次大戦期にアメリカが欲した物語は、ここに奇妙な一致をみたのである。

3 宣教の素地

——神の力を唯一保有する「選民」としてのアメリカ——

原子力エネルギーが「人知を超えた神懸かり的な力」であるというイメージは、1940年代初頭の米国社会において、実は決して珍しいものではなく、既に流通した認識であった。例えば1921年9月21日のNYT⁽¹⁸⁾には、「蛍の光」と同原理の光エネルギーの開発可能性について報じた記事が掲載されているが、これはローレンスが原爆関連記事に着手する十数年前のことである。本記事においては、未知なるエネルギーの開発に成功すれば、科学は聖書で奇跡とされたことを成し遂げる程に発展を遂げるだろうという科学者の証言が掲載されており、原子エネルギーの可能性が神の領域への到達につながることを示唆されている⁽¹⁸⁾。また、ローレンスが初めて原子力についての記事を書いた前年にあたる1929年5月28日の紙

面には、“New Light on Atomic Energy”という無署名の記事が掲載されている。この記事の最終部に紹介されているProf. Millikanなる人物の証言によると、原子力エネルギーの発見は想像を超えた、地球上で起こるはずがないと考えていた事象であり、人々は原始から存在する太陽光を唯一のエネルギーとして認識しなければならぬとする⁽¹⁹⁾。1920年代初頭より、原子力が神の領域に属する力／神聖な力だという等式が既に存在していたことが確認されることを鑑みれば、ローレンスが原子力を神の力と同等とみなしたことの背景には、既存の参照枠が存在し、この参照枠を巧みに使うことで、ローレンスの原爆ナラティブは米国にとってなじみ深い物語となり得たという事実が明るみになる。

しかしながら、「宗教と原子力との連関」に関し、ローレンスの捉え方はその他の原爆関連ナラティブの捉え方を踏襲し、既に使われた知的枠組みを参照しつつも、独自の視座を提供しているという点には注意しなければならない。まず、米国における多くの原爆関連ナラティブは、神の力としての原子力を驚異とみなし、人知を超えたパワーという認識の下、人間が触れてはならない禁じられた領域として見ている。NYTのアーカイブスには、1930年代〜40年代にかけて、米国の諸教会において「核エネルギーと人間の共存」についての説教が行われていたという記録が残されているが、このことは神と人間の領域が本来分離された別個の領域に属するものであるという前提に立っていると見える⁽²⁰⁾。さらに1920年代初頭から登場した原子力関連記事の殆どが、原子力が人々の生活を変える可能性を持った「錬金術」であるとしても、それは想像の次元に留まっており、原子力の仕組みや構造についての詳細な解説や具

体的な説明は成されていない。この背景には、人間はただ神の定められた法に従うべきであつて、神の正体を理解したり、神の領域に足を踏み入れることは許されないとする不文律の存在が見え隠れする。

一方でローレンスの語りでは、原子力を神の力としてその全能性に畏怖する描写が成されてはいるものの、その力は旧約聖書の創世記と重ね合わせられ、万物を生み出し、世界に調和と秩序をもたらす可能性として描写されている。例えば以下は、ローレンスがトリニティ・テストを目撃したことに基づくルポルタージュの一節であるが、原爆爆発の瞬間は、「交響曲のグランド・フィナーレ」という荘厳なイメージと共に描写される⁽²⁾。

閃光が続いて雷鳴のような音が轟いた。そしてその音は閃光が見られた限りの何百マイルの彼方まで聞こえたのである。咆哮は遠くの丘に当って反射し、さらにシエラオスキューロの山脈に反響して、あたかも地の奥から発せられた音響のように響き渡ったのだ。丘が「おお」と呼べば山脈も「おお」と和した。そしてそれは地球がこの間に確答を与えたため、突如として虹色に染まった雲と空とがそれに和したといった感があった。「原子エネルギー」、「然り！」。それは元素大交響曲の偉大なフィナーレのようであつた。元素交響曲、それは魅惑的で、驚異的で、高揚された精神に満ち、しかし破壊的な、不吉な、すべてを荒廃に導く、偉大な約束と預言とにあふれたシンフォニーだったのである。

この「宣教」の内容をローレンス自身の個人史の観点から解釈す

るならば、旧世界の終焉と新世界の到来という意味付けを原子力に与えたことの背景には、中世から時が止まった共同体において閉塞的な前半生を過ごし、外界との接触を抑制されていたローレンス自身の記憶が影を落としていると言うこともできるだろう。ローレンスにとつて原子力という「神」は閉ざされた時間的・地理的空間に個人を配置し、縛り付ける存在ではなく、限らない可能性を持った外界との交渉を可能とする存在なのである。しかし、原子力に肯定的な意味を付与したことは、かつてローレンスの内的世界を支配していた「神」そのものに対する冒瀆、あるいは不服従の表れではないという点は重要である。ユダヤ教からの離反は、神に「信者を時間的・地理的閉鎖空間に拘束する存在」という意味を付与した共同体に起因するものではない。このことは、合衆国亡命後も、世界を司るといふ神のみが有する力への信仰が損なわれていないことから窺い知れる。合衆国亡命直後から一連の原爆ルポルタージュを執筆するに至るまで、ローレンスは一貫して世界を司る力を備えた存在に対する畏怖と魅了の念を持ち続けていたのであり、この畏怖と魅了を原子力に投影し、原子力賛美の姿勢を貫き通したことは、彼が根源的には神への深い信仰を持ち続けていたと解釈することができる。ウイリアム・ローレンスは、ユダヤ教という精神的基盤から自らの意思で離反したものの、全能なる神の力への信仰自体は捨て去ることができなかつた。原子力をユダヤ教の代替として認識することは、神の力に近づこうとする一つの深い信仰心の表れであり、このユダヤ教信仰の代替としての原子力信仰こそが、ウイリアム・ローレンスという人物の特殊な宗教観でもある。

ローレンスと共にトリニティ・テストを目撃した多くの科学者達は、原子爆弾に終末的イメージのみを読みとったと言つてよい⁽²³⁾。彼らのイメージに沿うならば、原子力がもたらす世界は破壊の荒野であり、如何なる行く先も人類には提示されない。しかし、先に引用したローレンスの語りにおける、原子力に共鳴し、大地や雲、空の調和が壮大な音楽を生み出すというイメージは、終末の後に起こるであろう永遠なる千年王国の到来さえも予感させる。

万物が一体化し、調和へと向かうというローレンスの作り出したイメージは、新たなものを生み出し、新世界を切り開く突破口としての原子爆弾の肯定的イメージとも関連している。原爆炸裂の瞬間は天地創造の際の神の言葉と重ね合わせられ⁽²⁴⁾、人間の新たな自由を象徴するかの如く、自由の女神が手を広げて出現したと描写される⁽²⁵⁾。さらに、この最初の原子爆弾の炸裂の光景は新しい世界の誕生を意味しており、原爆によって誕生したこの新しい世界は、既に終焉した世界よりも素晴らしいものとなる可能性に満ちていると述べられている⁽²⁶⁾。

これら旧約聖書からのイメージが多用されていることの背景には、原子力という神を伝道し、アメリカを国民単位で原子力賛美へと駆り立てるといふ当時のアメリカの原子力政策と調和を為すメッセージが存在することは明白である。しかしここで注目すべきは、このメッセージを伝えるべく使われている語りの構造／型が、アメリカという国にとってなじみ深い伝統的な物語形式に則っているということであろう。サクヴァン・バーコヴィッチは『アメリカのエレミヤ』(1978)の中で、十八世紀におけるピューリタンの宣教師達が新大陸の共同体を一つの方向性へと誘導し、共同

体としての力を強化すべく、罪と救済、選民、千年王国といった聖書のモチーフを巧みに使いこなし説教を行っていたことを指摘している。十八世紀のアメリカは一つの確固とした共同体として統合し、団結していく為に、建国の任務を神から与えられた「神聖な任務」として認識し、伝えていく必要があった。伝えられる「目的」は時代の移り変わりと共に変遷するものの、そこで用いられる物語の「型」は類似の構造を持つていたと言つて良い⁽²⁷⁾。

そしてこの物語形式は後の世紀にも連綿と受け継がれていく。第二次大戦期、アメリカは枢軸国、またファシズム体制に対抗すべく、ナショナル・アイデンティティを強化する必要があった。従つて、このようなコンテクストの下でローレンスの原爆関連ルポは、アメリカ国民が原子力という「神」の力を与えられた唯一の国家であり、その力によつて悪しき存在である枢軸国を駆逐し、全世界を平和と希望で満たしていくことのできる「選民」であるという物語を伝える「伝道の書」として機能することとなつたのである。この「選民」というモチーフはローレンスのテクスト全体に散在してはいるものの、とりわけ『ゼロの暁』最終章である第二十章においてより強調されている。

結局は、原子力というこの広大な新しい大陸を開発したのは、アメリカの人民である。運命は今まで固く監禁されていた「この宇宙の戸棚」のカギを、われわれに与えることによつて、その責任をわが人民の上においた。そしてアメリカの人民はこの責任に対して誠意を守らなければならないし、またその誠意を守るであろう。われわれは、この大陸をわれわ

れ自身のために、また全人類のために、潤澤な新しい理想郷にまで開発し耕して、かつて見られなかつた富裕な健康な、そして幸福な新しい世界をもたらさなければならぬ⁽²⁸⁾。

ローレンスによるこの「説教」の一説には、原子力の平和利用という表向きメッセージとは別に、神の力を手に入れることが許されたアメリカだけが、「富裕で健康な」世界を創造していくことのできる世界で唯一の選ばれし民であるという伝統的物語までが内包されている。

十八世紀、アメリカ大陸に入植したピューリタン達にとつて、聖職者達の説教は唯一の強力なメディア媒体であつた⁽²⁹⁾。しかし十九世紀末、新聞という新たなメディア媒体が国民の間で急速に普及する時代が到来するに伴い、状況は変化することとなる。新聞は、人々が毎日目にする情報源であり、国家の目的を示しイデオロギーを表しているという点で、十八世紀入植時代の説教に替わる扇動の手段になり得たのだ。現在でもアメリカの新聞名で度々目にする“*the Herald*”は、宗教的意味合いを多分に含んだ語であり、この点からもアメリカ社会において、「説教」と「新聞」が共通した性質と目的を持つ概念であることが示唆されている。ローレンスが新聞という媒体を通し、原子力という神の「宣教」を行っていたことは、ピューリタン達が説教を繰り返し聞くことを通しナショナル・アイデンティティを形成していったという歴史を踏襲する行為でもあると言える。

4 神の正体を暴き、神に近づくといいこと

——ローレンスの原爆ルポが内包するもう一つの物語——

この様にローレンスの語りではアメリカの伝統的な物語形式に則つて原子力という「神」の物語が伝道されており、この宣教行為は第二次大戦期のアメリカ人の選民意識の強化、アメリカニズムの肯定へと行き着く。しかしこうした表向きの側面とは対を為すかのように、この「宣教」には暗く不吉なもう一つの物語が内包されていることもまた留意されなければならない。ローレンスにとつて原子力という名の「神」は、多くの原爆関連ナラティブが述べたように人間が触れてはならない恐怖の対象としての存在ではなく、人間にとつて接触可能なものとして提示されているのである。ローレンスがピューリッツァー賞を受賞したテクストの中には、原子力の開発過程を詳細に解説した十回の連載が含まれている⁽³⁰⁾。また、『ゼロの暁』における原子力の構造についての説明は、全テクストのおよそ半分を占めており、非常に緻密である。いずれにも共通しているのは、難解な物理学の専門用語を一般化し、大衆にも容易に理解できる次元で説明することで、原子力の物語を再構築したことであろう。NYNは1977年3月19日、ローレンスの死去に際して特集を組んでいるが、その中で「鮮烈でありながらシンプルな文体を用いることにより、原子力の専門用語を一般大衆に理解できるようなレベルで提示した」という点が最大の功績として挙げられているのは興味深い⁽³¹⁾。原子力の原理・構造を追う姿勢は、ローレンスが原子力と神を同一視していることを鑑みれば、神に近づこうとする行為であり、神の正体を理解しようとする行為としての意味合いを帯びる。

第二次大戦以前の米国民にとって、神は日常とは切り離された位置に所属する存在であつたが故、神と「私達」の領域には確固とした境界線が存在していた。しかしローレンスの「宣教」が示したのは、神は触れることができ、日常生活と近接した存在であるという点であつた。この「宣教」がローレンスの意図に反して、後の米国社会を不安に陥れることになる。

The Rise of Nuclear Fear の著者、スペンサー・ワートによると、広島・長崎への原爆投下から数年間は、米国民の間で原爆を現実生活をおびやかす存在として恐怖するという際立った反応は見られなかつた⁽³²⁾。しかし1940年代後半以降、ソ連との核開発競争が表面化した時代に突入すると、こうした反応が国民の間で際立つようになった⁽³³⁾。アメリカ社会における原子爆弾を取り巻く社会的コンテクストの変遷によって、「シンプルな文体と分かりやすい解説」によって原子力という神を肯定的な観点から広めようとしたローレンスの「宣教」は不気味な黙示録に読み替え可能になるというジレンマを抱えることとなつたのである。1946年当時、核兵器を「自らに返り得る脅威」として認識していなかつた米国民にとって、こうした「読み替え」は想定外であつたことは間違いない。しかし、原子力賛美という当時のアメリカ政府の言説に調和する本テクストが、1940年代後半以降のソ連との核競争を下支えする言説を持ち合わせていたというこの多義性については、軽視することはできないように思われるのだ。そしてこの点は、1940年代後半以降、米国が核兵器に対する異常なほどの強迫観念にとらわれるようになったことと無関係ではないだろう。何気ない日常を突如として原爆という虚構的脅威が侵犯する、というモチーフは1940年代後半

以降から現在まで頻繁に見られ、米国の核言説空間を支配しているといつても過言ではない。ローレンスの原爆ナラティブは、神の力に魅了されたが故に、その構造を「宣教」するという形で人々に知らしめたが、このことは同時に、本来人間が触れてはならない神の領域を接触可能なものとして暴いたということであり、原子力という神は人間に手の届かない存在ではなく、日常の中に潜む存在であるという現実をも露呈したのである。ファシズムという暴力的権力への対抗軸となりうるはずであつたローレンスの原爆ナラティブが最終的に米国社会に投げかけたのは、普遍的日常に支えられた現実世界と物語的な虚構世界との間に確固として存在していたはずの境界が瓦解したという現象であつたのだ。神と世俗、虚構と現実の境界の消失は、人間にとって未知なる現象であつたという意味において、ローレンスが「宣教」した様に、新しい世界の到来であつたことは間違いない。しかしこの世界では、「神」はアメリカ社会の日常に対しても働きかけるのであり、原子爆弾は、アメリカ社会においてさえもその力を行使する可能性がある。したがってこのことは、「摂理」(Providence)によつて神なる力、原子力を唯一保有することを許されたアメリカが、冷戦の萌芽という時代状況の中で、十八世紀から連綿と引き継がれてきた神に選ばれし「選民」としての地位を追われたことをも意味していたと言えるだろう。

5 終わりに

ウィリアム・ローレンスのナラティブは、原爆の製造と使用についての過程を、メタファーと自己表出性⁽³⁴⁾に満ちた表現で追つたテ

クストであり、原爆という虚構的な概念を独自の観点で再構築した一つの壮大な「物語」であった。ローレンスが原爆の物語をジャーナリズムを通して伝えることを「宣教」と考えていたことは本論で述べたが、原子力という神についての「宣教」は、正に「プロパガンディズム」(宣伝としての伝道)として、米国社会へ浸透していったのである。そしてこの物語が米国におけるポストヒロシマ・ナガサキの原爆観を形成する一つの大きな契機となったこと、またその言説空間にヒロシマ・ナガサキの被爆者達の姿が反映されていなかったことは、先行研究者が指摘するように、十分に考慮されるべきであろう。

しかし同時に、ローレンスの原爆テクストはポストヒロシマ・ナガサキの米国社会における核言説空間形成の一端を担ったという意味において非常に重要であり、単に被爆者不在の語りとしてのみでなく、第二次大戦直後の米国における「原爆」受容のあり方とその変遷という流れの中で再考されるべきである。本論で述べた通り、ローレンスのテクストの表層には、第二次世界大戦中の米国が欲していた物語が前景化されており、この物語を強化し、実現させるための装置として「全能なる神」が「原子力」と相似関係を為すメタファーとして使用されている。しかしここで重要となるのは、原子力という神が賞賛され、その存在が畏怖と魅惑をもって詳細に分析され、解明されることを通し、原子力という神は人々にとって接触可能な存在となっているという点である。

「神」なる力、原子力のこうした位置づけは、第二次大戦終結直後のアメリカ社会のコンテクストにおいては「原子力の平和利用」というアメリカのみが主導権を握る政策と奇異なる調和をとっ

ていると言つて良い。しかし1940年代後半、冷戦の萌芽というコンテクストの中でみるならば、原子力という「神」が人々の日常と近接しているということは、アメリカだけが神の力を保有することを許された「選ばれし民」であるという物語が崩壊したことをも意味していた。この点において、ローレンスの原爆テクストには、米国が対抗しようとした全体主義や暴力的権力と同等の、あるいはそれ以上の脅威が実は内包されていた可能性があると言える。

神なる力、原子力の解釈者であり伝道師であったローレンスは自身の「宣教」が、自らが幼い頃に完璧なまでに暗唱し得た創世記第三章「墮罪」の記述とパラレルになっていることに気づくことは決してなかったことだろう。しかしポストヒロシマ・ナガサキのアメリカ社会が置かれたコンテクストはこの第三章の第一節と極めて類似の状況に置かれていると言わざるを得ない。

さてヤハウエ神がお造りになった野の野獣の中で蛇が一番狡猾であった。蛇が女に向かって言った、「神様が君たちは園のどんな樹からも食べてはいけなと言われたというが本当かね」。そこで女は蛇に答えた。「園の樹の実を食べてもよろしいのです。ただ園の中央にある樹の実について神様は、それをお前たち食べてはいけない、それに触れてもいけない。お前たちが死に至らないためだ、とおっしゃいました。」すると蛇が女に言うには、「君たちが死ぬことは絶対にないよ。神様は君たちがそれを食べるときは、君たちの眼が開け、神様のようになり、善でも悪でも一切が分かるようになるのを御存知なだけのことさ」。そこで女はその樹を見ると、成程そ

れは食べるのによさそうで、見る眼を誘い、智慧を増すために如何にも好ましいので、とうとうその実を採って食べた。⁽³⁵⁾

蛇にそのかさされたアダムとイブが神の意志に背いたために楽園を追放されたように、アメリカが「選民」としての地位を追放されたのもまた、神のみが保有する力を手に入れるというタブーを犯し、神の激昂に触れてしまったためである。第二次大戦期という激動の時代におけるアメリカにとって、「蛇」とは一体、何者であったのだろうか。

注

- 1 *New York Times*, August 7, 1945.
- 2 Leslie M. Groves, *Now It Can Be Told: The Story of the Manhattan Project* ([1962], New York: Harper, 1983), 327.
- 3 Robert Jay Lifton and Greg Mitchell, *Hiroshima In America: A Half Century of Denial* (New York: Avon Books, 1995), 13-22.
- 4 William L. Laurence, *Reminiscences of William L. Laurence* Part 1, transcript of oral history taperecorded March 27, 1956, New York, by Louis M. Starr, director of Oral History Research Office, Columbia University. 尚、本資料の収集にめたつてはコロンビア大学オーラルヒストリー調査室、及び国立国会図書館からの協力を得た。
- 5 繁沢敦子『原爆と検閲』（中公新書, 2010年）、20頁
- 6 Beverly Ann Deepe Keever, *News Zero: The New York Times and the Bomb* (Monroe, ME: Common Courage Press, 2004), 40.
- 7 前掲（注2）
- 8 Amy Goodman and Juan Gonzalez, “Hiroshima Cover-up: Stripping the War Department’s Timesman of His Pulitzer” (August 5, 2005), September 19, 2014.
<http://www.democracynow.org/2005/8/5/hiroshima_cover_up_stripping_the_war>
- 9 前掲（注6）
- 10 Stephen Walker, *Shockwave: Countdown to Hiroshima* (New York: Harper, 2005), 53.
- 11 前掲（注4）
- 12 同上
- 13 同上
- 14 JewishGen, September 18, 2014 <<http://www.jewishgen.org/>>
- 15 Elaine Cohen, “Partial List of Emigrants from Salant”, September 18, 2014
<<http://kehalilinks.jewishgen.org/Salant/append6.html>>
- 16 前掲（注4）
- 17 *New York Times*, May 5, 1940.
- 18 *New York Times*, September 21, 1921.
- 19 *New York Times*, May 28, 1929.
- 20 Donald S. Harrington Papers (Manuscripts and Archives Division, The New York Public Library), Box 156.
- 21 例えば、ユニタリアン派の The Peoples Liberal Church の牧師であったナナル・ハリントン(Donald Harrington)は1945年10月7日 “The Atomic Age: Doom or Dawn?” という説教を行なった。本説教では、「核分裂」を「神による素晴らしい未来の可能性」と

言い換えていたり、ローレンスの記事を一部引用し H.G. ウェルズが 1914 年に予言した世界が到来したことに言及していることから分かるように、ローレンスの原爆記事との間テクスト性が見受けられる。しかし興味深いのは、ハリントンの説教はあくまでも第二次大戦中から米国のキリスト教会の間で主流であった原子力Ⅱ「恐るべき神」「触れてはならない存在」という見解を維持しているという点であり、この点において「神は触れることのできる存在である」というローレンスの「宣教」とは決定的に異なっている。第二次大戦末期から直後におけるこうした米国キリスト教会の原子力に対する見解は、一つの型を成しており、この型は後の 1946 年 3 月に NYT の一面に大々的に発表されたキリスト教会連合協議会 (Federal Council Churches of Christ) 声明の土台を組んでいると言つて良い。

22 William L. Laurence, *Down Over Zero: The Story of the Atomic Bomb* (New York: Alfred A. Knopf, 1946), 4; (邦訳) 崎川範行『ゼロの暁―原子爆弾の発明・製造・決戦の記録―』(角川書店, 1955 年)。

23 例えば、マンハッタン計画に加担し、ローレンスやオッペンハイマーと共にトリニティ核実験にも立ち会った物理学者のフィリップ・モリソン (Philip Morrison) は、*ニューリパブリック誌 (The New Republic)* 1946 年 2 月 11 日号において “Beyond Imagination” と題した論考を発表している。本論考では「抵抗の不可能性」「無差別性」「瞬間の脅威」といった原爆の性格に関する繰り返されるモチーフが多用されており、原爆の使用及びその負の波及効果に対する断固とした弾劾の姿勢が窺い知れる。

24 前掲 (注 22)

25 同上、271 頁。

26 同上、270 頁。

27 Saavan Bercovich, *The American Jeremiad* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1978), 62-92.

28 前掲 (注 22)

29 大西直樹『ピルグリム・ファーズという神話―作られた「アメリカ建国」―』(講談社, 1998 年), 115.

30 本連載は 1945 年 9 月 26 日から開始されている。

31 *New York Times*, March 19, 1977.

32 Spencer R. Weart, *The Rise Of Nuclear Fear* (Massachusetts: Harvard University Press, 2012), 57.

33 同上、60-69 頁。

34 この概念は吉本隆明によって創始されたものであるとされるが、本論考では吉本の言語論を解説した玉木明著『言語としてのニュー・ジャーナリズム』(學藝書林, 1992 年) に依拠している。玉木によれば、「自己表出性」とは「指示表出性」と対を為しており、ジャーナリズム言語における「客観的表現が言語の指示表出性の側面に、主観的表現が言語の自己表出性の側面にそれぞれ対応する部分を持つている」と説明付けている。

35 関根正雄訳『旧約聖書 創世記』(岩波文庫, 2005 年), 14-15.